

ないとしたら、その理由はどこに探索すればよいのか。

以上の基調報告ののち、シンポジウムはパネリストと会場との質疑応答に移り、そこでもまた、今後豊かな展開をもたらすべき基本的な論点のいくつかが提出されることとなった。まず、朴一功氏（甲南女子大）が掲げたのは、「学」の形成ないし展開にあたって「自前の」力と「外来的な」力がどのように働くかという問題である。氏によれば、プラトンはそのディアレクティケー（対話）という方法で在来の「学」に批判を加え、いわば在来の「学」の諸要素間の相互矛盾を鋭く突くことから新たな「学」の形成に至った。他の文明圏の諸モデルと異なり、珍しく「自前の」力による「学」の更新が企てられたことになるが、これは「学」の連続と非連続の問題に発展させることができる。パネリストの方々からは、朱子学形成期の例、またユダヤ学における三段階の転換期に働いた外力の例などが示された。

また相田満氏（国文学研究資料館）は、特に「学」の伝承のシュポール（支え）である文字ないしその書体の変革期と、当該文明圏におけるなんらかの危機感との関連を指摘された。パネリストの方々からは、たとえば紀元前後に中期インド語のサンスクリット化が進められ、その結果バラモン層以外の階層も古典に接することができるようになった現象が挙げられ、その変革の背景には当時の異民族の侵入という一種の危機が存在すると説明された。私見によれば、いくつかの文明圏では書体の変革と古典の伝承は密接に関連する興味深い問題である。たとえばビザンツ世界では、9～10世紀と13～14世紀の二度にわたり書体の変革が生じ、古典を伝える写本は新しい書体に書き移されたわけだが、そのつどなんらかの校訂作業がなされて標準となる最良テキストが定められ、それが新しい書体で流布する結果となった。古代ギリシアのテキストがその古さにもかかわらず比較的良好的形で伝えられたゆえんであるが、このうち第二の変革の時期はパレオロゴス朝ルネサンスと結びついている。また西ヨーロッパのラテン語世界でも、カロリング・ルネサンスにおける標準小文字書体の形成にともなって写本の校訂と書き換えが組織的におこなわれ、標準テキストが定められたようである。社会的な危機（第四次十字軍のコンスタンティノープル占領、ないしメロヴィング期の社会的混乱）に続く安定期に新しいシュポールが出現し、それが古典のテキストの統一を促進し、またその一方でおそらく多くの異文を切り捨てたわけであるが、これなどは、現在進行している各種メディアのデジタル化が古典のテキストにどのような影響を加えるかを占う上で興味深い。

以上、論点によって、すべての文明圏における古典学

のあり方にかかわる場合もあれば、またいくつかの文明圏の古典学の焦点からはずれる場合もある。後者の場合、その論点は当該文明圏の古典学史によって取り扱われなかったわけだが、それをあらためて問い直す作業を通じて、その文明圏の古典学は新しい問題群と向かい合うことになるであろう。いずれにせよ、「学」の理念というテーマは、論点整理のプロセスを経た上で、あらためて討議されるだけの価値がある。研究課題としてどれほどの労力を費やせばどれほどの成果が得られるか、そのランタビリティ（収益性、採算）はきわめて高いといえよう。

古代ギリシアにおける 「学」の理念と内実

内山 勝利

あるギリシア哲学史家は、こう述べている。「science（学、知的認識）を記述するには、世界についてギリシア人の流儀で考えることである」という言い方をすれば、それで十分である。なぜscienceがギリシア人の影響を受けた人びとの間にしか存在してこなかったかの理由もそこにある」（J. Burnet）

事実、近代西欧のscienceは、基本線として、ローマ、ビザンツ、西欧中世世界を経由する仕方で、古代ギリシアの理念とプログラムを受容したものであった。それが「ギリシア人の影響」なしに成立しえなかったことはまぎれもないところである。

ただし、その淵源にあったものが、長い受容の過程において、いささかの変貌を遂げていったことも否めないのではないか。さきのパーネットの発言は、事後的に捉え返した抽象的なギリシア像をなぞっているようにも思われる。（むろん大局的には的確な捉え方になっていると思われるが、今日のように、多様な古典分野の方々が一同に会している場ではどのように響くものか、もはや単なるアナクロニズムに墮しているのか、依然として有効性をもっているのか、反応を気にしながら、冒頭へあげてみた。）

古代ギリシアの「学」の理念は、「愛知の精神（philosophia / 哲学）」を中核とする。それは当初、明らかに、前6世紀初頭あたりにこの地で「発見」された、人間の

新たな活動のあり方を指すものであった。「哲学の祖タレス」の名は、その「発見」を言わば象徴するものである。それは、基本的で簡明な言い方をすれば、そのつどの必要性や他からの命令や義務を離れて、もっぱら物事を知りたいという内発的な欲求に従った活動である。そういう欲求の存在をはじめ彼らは自覚し、それを意識的に行使しはじめたところに「愛知の精神 (philosophia / 哲学) の源があった、とってよかろう。philosophia とは、直訳的には、「知的好奇心」のことである。当時それはさまざまな仕方で、ギリシア人特有の活動として発揮された。タレスは、それを最も活発に、かつ最も効果的に行使したというわけである。

「観想 (theoria)」と「実践 (praxis)」の対置が鮮明にされるのは前5世紀のアテナイにおいてであろうが、既にタレスの活動にもいま言ったような意味で、当面の実践的要請を離れて純粹に知ることへの指向は強く働いている。たとえば、彼はエジプトの「土地測量術」を習いおぼえると、ピラミッドの高さや海上の船同士の距離を測ってみせたという。そこには、当座の実用性を離れても、方法のより大きな可能性の発見と空間一般への適用の拡張において、全く新たな活動の質が示されている。その方向をいま一歩進めたところに、普遍的な空間の「土地測量術」としての「幾何学」(いずれも geometria) が成立するはずである。彼がギリシアに「幾何学」をもたらしたとされるのは、おおよそそうした意味においてであろう。先進オリエント各地の文明の成果が、同様の変容をとげて、ギリシア的な「学」に糾合されていく。

彼らの「学」は、同時に、当初から「哲学」として、世界の成り立ちとその内に営まれる人間の生の意味をとりおさえるという、統一的なモチーフに裏付けられてもいた(「愛知」の究極の課題は、おのずからそこに収斂した)。どれほど「学」の領域が広がるうとも、この統一視点をけって手放そうとしなかったところが重要である。初期ギリシア哲学者たちの知的関心(すなわち哲学)は文字どおりあらゆる領域においてあらゆる方向に発揮され、たとえば古代原子論(アトミズム)を大成したデモクリトス(前5世紀後半)ないしデモクリトス派の著作は膨大なもので、自然学諸分野はもとより、数学、音楽、倫理学、民俗学、技術論(戦術法も含まれる)などにまでわたり、72の著作名が伝えられている。にもかかわらず、この「学問の万能選手」(当時にあってはむしろ悪口だが)においては、すべてが統一的な視野の中に配され、彼の哲学的骨格を支えるものとなっていたことが十分に推測される。通念的には「哲学」と「科学」が二極化したと言われるヘレニズム時代における思想展開をみると、それらの諸「科学」もまた、学派色の濃

厚なもので、この時代にさかに行われた科学的な論争(たとえば医学や天文学上の諸問題について)がつねに哲学上のそれと一体的であったことは、(よかれあしかれ)両者の連動性を強く示唆していよう。

プラトンは「哲学」をそれ自体ひとつの「学」として確立し、世界認識と生のあり方を統一的に洞察する方法の組織化を目指した。なお、プラトンと同時代に、イソクラテスらがソフィストの伝統を継承しつつ、同じく統一的な「学」の理念として「哲学」を掲げて登場してくる(彼もまた「哲学」を標榜している)。その実質をなす「弁論術」は、ほぼ文学研究を包括するものへと発展していく。プラトンの学園アカデメイアとイソクラテスの弁論術学校は、ほぼ同時期にできたもので、両者はかなり激しくライバル意識を燃やす。アカデメイアは確実な原理にもとづく厳密な思考こそが物事を正しく見て取るために不可欠な方法だとして、そうした思考力を養うものとして、数学的訓練をふんだんに課す。それに対してイソクラテスのほうは、「学」は実社会で役立つものでなければならず、そのためには過度の厳密さは無用であるとして、すぐれた弁論作品の修得、研究や弁論の実作をカリキュラムの中心におく。こうした両者の対立は、今日も絶えることなくつづいている虚学実学論争のはじまりに他ならない。結果的に見ると、イソクラテスの学園からは、名を成すほどには至らない弁論家をわずかに輩出したにとどまったのに対して、アカデメイアからは、すぐれた哲学者や数学者のみならず、ギリシア各地で政治的指導者としても活動した人たちが多く出ていることは、やはり注目されなければなるまい。

哲学と諸科学の分離独立化を促したのは、アリストテレス(前384~322)による「科学基礎論」であり、とりわけ彼が各専門領域ごとの固有の対象には固有の原理と方法があることを明示したことにある、とされる。プラトンにおいても諸科学(特に数学)の位置づけはほぼ同様であるが、ただしそれらの「原理」なるものは、彼によって「仮設的前提/ヒュポテシス」と呼ばれ、それぞれの科学自体のシステムは、あくまでも「夢の中での必然性」ととどまるものでしかない。そのかぎりにおいて、明確に哲学のもとに従属する。たしかに、アリストテレスにおいては、各領域の自立性がより強調されているであろうが、はたして彼の「科学基礎論」が、当時において、どこまで実効力をもちえたかは、すぐには結論できないところもあるう。

なるほど、つづく時代におけるアレクサンドリアの諸科学の成立と発展は目覚ましいものがあった。その多様化と専門化は、ほとんど現代の趨勢と根本的に異なるところはないほどである。とはいえ、注意すべきは、それ

らがお、統一的原理を指向する哲学との深い呼応関係のもとにあったということであろう。この点はさきにもやや触れかけたところであるが、ネガティブに言えば、当時の諸科学はむしろ次第に、ストア派をはじめとする学派哲学に染めあげられていったと見るべきであろう。これは、プラトン以前の時代における哲学と科学の自由かつ相互連携的な一体性とは似て非なるものである。アレクサンドリア時代以降、哲学を離れた諸科学が、そのためにやがてエネルギーを失い、衰微していったとする観点は、やや改めなければなるまい。

19世紀末～20世紀初期の 中国における古典学の崩壊

平田 昌司

小島祐馬(1881～1966)の要約によれば、中国の「天下」とは「現に政治の効果の及んでいる土地人民ばかりでなく、ぜんぜん未開の土地・未知の民族までも包含し」、「将来だんだんに中国の統治が拡大され、最後に世界が一つとなった場合、はじめて一大社会となり得る可能性を含んでいる」概念である。その理想世界の創造にあたっては「家族結合の紐帯であるところの親愛の情を推し広めて、これを世界全体に及ぼそう」とし、「政治は、権力者による支配ではなく、有徳者による教化であり指導でなくてはならない。」「為政者に対してその恣意を禁じ、仁政を布かしむべく」設定された権威は「儒家の政治理想をのせた経典」であり、「経典の精神にしたがって天子の恣意を禁じ、その道德政治を強要する」のは、「大臣宰相以下の官吏」すなわち「統治階級」である。「漢以後の官吏登庸法」は「治者階級の子弟たると、庶民の子弟たるとを問わず、有徳者を治者階級に引上げるという根本原則の上に立っていた。ただし、儒家を政治の指導理念としはじめた当初、「純粹の儒家思想では、当時の社会の実情に即した政治はできない。そこで漢代には表面儒家の政治を標榜しながら、内面では法家の政治思想を多分に取り入れた」やりかたが、「独り漢代ばかりでなく、清朝の末期帝政の亡びるまで二千有余年の間継続し、これが儒家政治の実体であるという風に一般に考えられることとなった」(以上の引用部分は「中国

の政治思想」による。小島祐馬著・内田智雄編『政論雑筆』、みすず書房、1974年、に収める)。言いかえれば、「儒教の理想主義と行政の現実主義とは、中国社会を構成する、言わば楕円の二つの中心のようなものであって、両者をふたつながら視野に入れない限り、中国社会の全体像を把握することはできない」(バラッシュ「一七九三年に作製された地方行政実務提要」の佐藤慎一氏解説。澤谷昭次『中国史書論攷』、汲古書院、1998年)。

理想にしたがうならば、古典学の対象は、儒家の経典たる「五経」や「四書」を中心としつつ、歴史記録、典範となる韻文・散文作品に及ばねばならない。また、これら古典は単に読解の対象であるばかりでなく、読み手本人の文体規範でもある。しかし、「五経」など骨格となる古典は、成立後千数百年の時間がたっているために現実の社会・文化との落差が大きく、そのままの姿では消化しにくい。行動の規範としての古典の地位を維持するために用いられるのは、時代の価値基準を導き入れた新しい注釈である。また、読解上の難度が高く、文体の手本としにくい点を救うため、韓愈(768～824)を代表とする唐宋散文作家の著述が代替物とされた。それでも補いきれない、さまざまな現実に対処するためには、現実主義に基づいた各種の実用的手引き書が編まれていく。

1. 「統治階級」の選抜試験たる科挙受験教育のためのカリキュラム、初等教育読本、科挙の模範答案集
2. 個人・家族の修養や社会生活の手引き(清の陳弘謀『五種遺規』の「養正」「教女」「訓俗」など)
3. 行政実務の手引き(元の張養浩『三事忠告』、清の陳弘謀『五種遺規』中の「従政」・汪輝祖『学治臆説』・鄭端『政学録』など)

このような理想主義と現実主義の共存は、たとえば朱子(1130～1200)の学問的系譜をうけた元の程端礼『程氏家塾讀書分年日程』(1315年)を始めとする近世中国の教育プログラムで普遍的に認められる。しかし、アヘン戦争(1840年)の敗北は、「学」の理想・現実いずれをもってしても対応しきれない西洋の存在を中国の知識人に認知させ、ふたつの面から「学」の伝統を動揺させた。第一は、中国の知識体系が西洋に比して欠陥をもつのではないか、との懐疑である。この見解は、まず宣教師たち 中国の学問体系における「神理(キリスト教神学)」「物理(自然科学)」の欠陥を批判したY. J. Allen(1875年)、外国語学習の必要性・西洋式教育の優越性を説いたE. Faber(1882年)、儒学がキリスト教に比して欠陥の多い思想体系であることを強調したD. Z. Sheffield